

野球ファンの内集団ひいき

— 協力行動のコストに着目して —

○中川裕美¹・中西大輔²

(¹広島修道大学大学院人文科学研究科・²広島修道大学健康科学部)

目的

内集団ひいきとは自分の所属する集団（内集団）に対して協力的になることである。内集団ひいきがなぜ生じるかについては社会的アイデンティティ（以下、SI; Tajfel & Turner, 1979）と互惠性の期待（Yamagishi & Kiyonari, 2000）から説明されている。SIは同一化した集団を他の集団よりも優越させたい、互惠性の期待は協力が他の内集団成員から返報されるとの期待から内集団ひいきが生じるという。

先行研究の中川他（2015, 投稿中）では協力にかかるコストを明示しない場合、SIと互惠性の期待が働き、明示した場合には互惠性の期待のみが働いて内集団ひいきが生じた。すなわち、互惠性の期待の心理要因を優勢にする状況要因の一つは、協力のコストであることが示唆された。しかし、場面想定法における結果は行動意図に過ぎず妥当性には限界がある。そこで、本研究では金銭報酬を用いた1回限りの囚人のジレンマ（以下、PD）ゲームを行い、中川他（投稿中）を再現し互惠性の期待から内集団協力が生じるか検討する。

研究1（広島）

方法 実験は2017年4月に行い、参加者109名中野球ファン38名（男19名、女19名）を分析対象とした（カープファン24名）。平均年齢は18.62（SD=0.79）歳だった。

手続き まず、事前質問紙への回答を求め参加者の応援する（好きな）チームを選択させ、同一化（中川他, 2015）、互惠性の期待（神・篠塚, 1996）を測定した後、1回目の取引を開始した。同封の集団所属性の用紙を見て自分と相手との取引状況を確認し元手の200円から相手へ提供する金額を記入するよう求めた（10円単位）。実験者は「提供金額は元手から引かれ2倍になって相手に渡り（相手も同様の決定を行う）ゲームの結果によって報酬が決まる」と教示した。参加者は同様の取引を計3回（相手の情報がない不明条件/互いに同じチームを応援していると分かる相互条件/自分だけ相手が同じチームを応援していると分かる自知条件）行った。

予測 SIが支持される場合、相手が野球ファンと

分かる相互・自知条件で提供金額が高くなる。互惠性の期待が支持される場合、互いに野球ファンと分かる相互条件のみで提供金額が高くなる。

結果 提供金額を従属変数、所属性の知識を独立変数にした分散分析を行った結果、知識の主効果が見られた（ $F(2, 74) = 12.75, p < .01, \eta_p^2 = .26$ ）。相互条件（ $M = 118.68, SD = 70.37$ ）で最も提供金額が高く、次に自知条件（ $M = 105.26, SD = 68.17$ ）、不明条件（ $M = 80.26, SD = 60.87$ ）の順であった（ $p < .01$, Figure 1）。以上の結果から互惠性の期待が支持されたが、自知条件の提供金額と同一化は相関関係がなくSIは支持されなかった。

研究2（神戸で追試）

方法 実験は2017年6月に行い、参加者108名中野球ファン94名（男53名、女41名）を分析対象とした（阪神ファン59名）。平均年齢は18.97（SD=0.97）歳だった。

結果 Study 1と同じく知識の主効果が見られた（ $F(2, 186) = 28.94, p < .01, \eta_p^2 = .24$ ）。相互条件（ $M = 119.04, SD = 65.30$ ）で最も提供金額が高く、次に自知条件（ $M = 95.85, SD = 66.87$ ）、不明条件（ $M = 76.28, SD = 60.87$ ）の順であった（ $p < .01$, Figure 1）。以上の結果から、研究1と同様に互惠性の期待が支持されたが、自知条件の提供金額と同一化は相関関係がなくSIは支持されなかった。

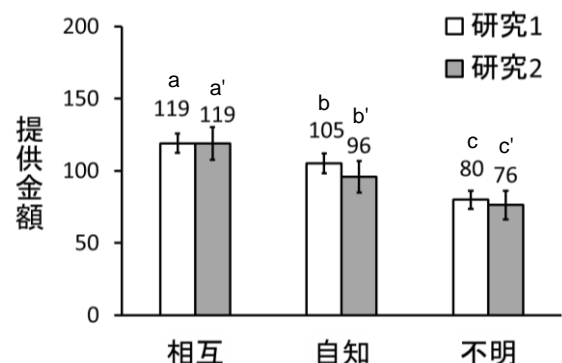


Figure 1. 野球ファンの提供金額（英字が異なれば有意差あり）。

考察

研究1及び2で中川他（投稿中）が再現され、互いに野球ファンと分かる時に最も多くの額が提供された。すなわち、行動実験でも協力のコストによって互惠性の期待が優勢になった。